



学校法人  
鎌倉女子大学

## ある友人からの手紙ー「合唱は音楽の Top of Tops」

「みどり祭」が終わり、キャンパスの紅葉もいっそう色づく頃、ご夫妻でみどり祭を訪ねて下さった旧い友人から手紙をもらいました。

そこには、紀子先生の指導により、初等部生、大学生、大学合唱団OG、そして市民の方々によって歌い上げられた交声曲「かながわ<sup>※</sup>」を聴いた感想が<sup>る</sup>綴られていました。

私も、どちらかという合奏曲に心が向き勝ちなところがあるものですから、この手紙で合唱の力についてあらためて目が開かされたような思いもあり、またしばらく会わないうちに友人の中に育まれていた深い宗教性に触れて嬉しくもあり、私だけの目に止めおくのももったいない気がして、ご本人の了解を得て、ここにご紹介させていただきます。

……先日は楽しく過ごすことが出来、至福の時でありました。「みどり祭」に参加出来、夫婦共々心よりよかったと思っております。

いろいろな展示を見て、学生と話し、音に誘われるまま、あの後ずっとコミュニティ・モールにいることになった訳ですが、合奏から始まり合唱の段になると、私の感動は頂点に達していました。学生達の生き生きとして歌っている姿を見ていると、やはり合唱は音楽の Top of Tops に位置するものだという思いを新たにいたしました。

私は昔からクラシックは神を感知出来るように思えるバッハがとりわけ好きで、福井さんもお承知かと思うのですが、バッハの演奏を生で初めて聴いたのは今から40年も前になるでしょうか、チュービンゲン大学の講堂でカール・ミュンヒンガー指揮によるシュトゥットガルト・カンマー（室内）オーケストラのブランデンブルク協奏曲全曲でありました。

ミュンヒンガーは戦後バッハの作品をもう一度見直し新たな解釈をもって演奏したことに功があり多大な評価を得ていました。私が帰国する際の土産のLPジャケットには演奏家全員とミュンヒンガーのサインがあり、全音符で五線譜に B-A-C-H と書かれており、その下に Bach ist Anfang und Ende aller Musik! (バッハは全ての音楽の始めにして終わり!) と結ばれておりました。

ミュンヒンガーがなぜバッハを好んで演奏したのか、それはきっと敗戦の真っ只中であって、国土は荒廃し国民は憔悴しきって、この世に希望を見出せない中、実生活からの苦しみから逃れ天上界にいざなえる音楽こそ彼らにとってバッハの音楽ではなかったのかと。人々は直接神と出会うことが出来る感覚を求めたわけです。

一方、合唱はどうかといえば、合奏も合唱も複数の人で演奏することは同じですが、言わずもがな、歌詞があるかないかの違いです。私達は当然歌詞を理解しながら曲を聴いて

いるわけですが、この歌詞で鮮やかにその情景が浮かび、曲と相まってより一層の感動を覚えるのです。

「かながわ」は壮大な曲で合奏曲としても素晴らしいものであったと思います。しかしなぜ紀子先生がこの曲に思い入れがあるのか、それはメロディーに歌詞をつけることによって、その歌詞の文言文言によって、彼の日の場面が紀子先生に降りてくるのです。先生が挨拶の中で四世代一堂に会する喜びを述べておられました、私を含めた聴き手が紀子先生と「共通体験」をしているような感覚にとらわれ感動を覚えるのです。生太先生、尚先生がいつもそばにいて守ってくださる、つまりは神と随伴しているような喜びの感覚がきっとこの一曲に秘められているのです。

合唱は歌詞がありピアノ一台の伴奏で物を語る（本来ピアノがなくてもいいのですが）。歌詞があることによって自分の体験と他者の体験とが相まって圧倒的な説得力をもって我々の心を揺り動かすのです。それはバッハの音楽のように天上にいざなうものではなく、現実生活を真摯に生き、感謝し、今を生きる歌い手に神が宿るのです。彼ら学生達の明るさ清廉さは森羅万象 <sup>ことごと</sup> 悉くに宿っている絶対者に無自覚ではあるが遭遇している証に違いないのです。ですから、天上へいざなう音楽より私は合唱がより人々に感動を及ぼすものであると確信するわけです。

もっともっと言いたいことがあるのですが、いずれお会いする時にまたお話することにして・・・・・・・・

※「かながわ」は、渡辺亘氏によって合奏曲として作曲され、松本尚先生がこれを聴き感激し、当時本学の音楽科の教授であった養田良子先生に作詞を依頼、この度紀子先生の求めで子ども心理学科の渡辺宏章先生が「みどり祭」の合唱用に永久保存版として新装編曲したものです。

[>前のページへ戻る](#)